
株式会社 黒獅堂 I

黒雛 桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

株式会社 黒獅堂 I

【Nコード】

N2935F

【作者名】

黒雛 桜

【あらすじ】

ある世界のある場所のある会社の物語。

ブローグ

それは、世界のどこかに存在している。
それは、世界のどこかで求められている。

望むものだけがそれを知ることができる。

『弊社はどのようなご依頼も承ります』

あの夏の日。

あたしは「どんなのぞみもかなう」ビルに行った。

ねずみ色の、すぐみすばらしいところ。

となりのたてものにはさまれて、キュウクツそう。

パパのビルの方が、せも高くて、ピカピカに光ってるわ。

かんばんのないそこは、本当にあたしのぞみをかなえてくれる
のか、それだけがしんぱいだった。

でも、引きかえさない。

立ちどまらない。

黒のフリフリワンピースをゆらして、あたしは歩いた。

入り口のじどうドアは、があがうるさい音をたてて、ゆっくり
口をあけた。

いっぽ中へ入ると、まるで、いせかいに来たみたい、てんじょ
うも、かべも白くてキレイで、ゆかもぴかぴか光っている。ねずみ
色っぽいタイルに、あたしのすがたがはつきりうつってた。

なんだか、「アリス」になったみたい。

顔を上げると、目のまえにうけつけカウンターがぼつんとあつて、そこには外国のお人形さんみたいな女のひとが、あたしを見ていた。金色の、くるくるしたかみの毛で、顔は雪みたいに白くてきれい。青い目が、少しこわい。じつとどこかず見ているんだもの。

『いらっしやいませ、お客様。本日はどのようなご依頼で?』

きゆうによこからきこえた声にびっくりして、あたしは声のする方に目をむけた。

みあげると、そこにはせの高い男のひと。

パパのかいしやにいろような、黒いふくをきた、男のひと。

あたしは、ゆうきを出して、『いらい』する。

のぞみを、かなえなきや。

*

幼いわたしは、臆することなくスーツ姿の男に望みを、願いを、いや……野望を吐き出した。しかし、それはには、依頼に見合った金額を支払わなければならなかったのだ。

60兆円という聞いたこともない単語がどれほど莫大な金額か、幼いわたしには理解の範疇を超えていた。

でも、引き下がることはできない。どうしても、願いを叶えたいのだ。

少し困った表情を浮かべたあと、スーツ姿の男性社員はその場を去って、どこかへ行ってしまった。男は戻ってくるなり、幼いわた

しに述べた。

『依頼を果たすには、前払いである60兆円をお支払してもらわなければなりません。お支払いできないという場合には、この度のご依頼はお受けできない規則になっております。』

しかし、お客様がどうしてもというのなら、その依頼を御自身で成すための「力」を与えましょう。ああ、もちろん特例中の特例ですよ。

その「力」を得るには、同等のお支払いが必要です、が。弊社の社員として、その分の金額を働きながら返済するというのならば……。

もちろん、完済するまで「力」は形式上弊社所有となりますが

』

ずらりと活字を並べられた契約書にサインを記す。

迷いなど、無かった。

幼いわたしは依頼人であると同時に、“エージェント”となった。

依頼人は麗しき受付嬢に見送られ、再び自動ドアを通して、日常の雑踏に戻るそうだ。

本来ならば。

しかし、わたしの場合、もはや日常に戻ることはない。

日常の雑踏に、二度と戻ることはできない。

幼いわたしの、いえ、『わたし』の願いが 依頼が果たされるのはまだまだ先のこと。

いつになるかは分からないわ。

こうしてわたしはこのビルの中の一人となった。
この会社の社員となった。
依頼人であり、エージェントとなったのだ。

今日もどこかで、誰かが、依頼をする。

『いらっしやいませ、弊社はどのような依頼も承る、優良企業で
ございます』

ねずみ色ビルの最上階、銀のプレートを掲げた一室。
机と椅子、本棚という少ない内装で、社長室と呼ぶには味気ない
気もする。

しかし、本人がそれを気にしたことは一度もない。
愛用のデスクに備わった黒い革張りの椅子に座る。その者こそこ
の会社の統率者。

背面を向けていた椅子がキィと音を立ててゆっくりと回転した。

そこには大きな椅子に似合わぬ、ダークスーツに身を包んだ、十
二、三歳の少年が座っている。

耳くらいで綺麗に切りそろえられた黒髪。

冬の夜空の如く澄んだ黒瞳は、子供とは思えぬ落ち着きを持ちあ
わせ。

細い指を組んで、デスクに両肘を預け、
社長は言う。

『ようこそ、黒獅堂へ』

世界のどこかに存在する、優良企業。
その名は

株式会社 黒獅堂

1章 H Y S T R I X 【 I 】

少女は願った。

己の生きる世界を憂いて。

「それでは、ご依頼承りました。山上嵐様　いえ、たった今から貴女は弊社の社員……その名で呼びするのは相応しくありませんね。

……コードネームは、」

首都圏のビルが混雑に建てられた、その一角。

建物と建物の細い路地裏。

高いビルが光を遮断し、昼間にもかかわらず、湿った空気が不気味さをより濃密なものとした。

そんな中、壮年男性の懇願にも似た悲痛な絶叫が、暗がりにもこだまする。

「お、おれは……裁判では無罪を勝ち取ったんだ……！　い、今更罪を償えだど？　バカバカしい！」

人気の無い路地裏に、男の声は虚しく響いた。

ビルの外壁に背中を預けると、全身に噴き出る冷たい汗に思わず身震いが起こる。

額にひたりとへばりつく薄くなった髪を、肉付きの良い腕でぐいと拭った。

己の命を懸けた鬼ごっこに、今にも心臓が張り裂けそうになるほ

ど男は恐怖した。

不意に、怖れていたものの声があがる。

「鬼ごっこはおわりよ」

それはこの暗い路地裏には不釣り合いな、上品で高貴な少女の声。反射的に男は声の出所に視線を走らせ、鬼を見た。

逆光なのか、人物のシルエットだけが暗がりには浮かび上がる。しかし、それだけで男の体が震えだすのに十分であった。

左右高い位置で結んだ長い髪、あまり高くない背、丈の短いスカート、そして……右手に握られた太い幅の、剣。

大剣は暗がりの中、光も浴びず不気味にその刃を煌めかすのだ。

コツコツと静かに響く足音に、男はその場から一步も動けずにいた。

「おっさん、ザンネンだったなあ、逃げられやしねーぜえ。この、魔剣・テイルヴィング様と」
「わたしからは、ね」

粗雑な、聞いていて気分を害するような男性のだみ声と、先ほどの少女の声が連続。

くすくす、と小さな笑い声。
ヒッヒッヒ、と下品な嗤い声。

男に近づく影は一つだけ。目の前の少女のものしか、ないはず。

だが。

だみ声の主はどこに、と男が視線を泳がせていたそのとき。

「処刑執行士、山上嵐 参る」

少女が右手に持った大剣を両手に持ち直し、身を低くしたかと思うと一瞬で駆け出した。

迫り来る死神に男は大きく目を剥く。全身に噴き出る汗は、氷のように冷たく。

「ゲヒヤヒヤアッ！ 悪人に安らかな死なんぞ、ねえーんだぜえ！」

少女のものではない、ひどく粗野なだみ声が下品に嗤った。皮製であるローファアの音が踏み込む際、より一層高い音が響いた。

刹那。

大上段に構えた大剣は大気を切り裂きながら振り下ろされる。男の肩から腹にかけて、まるで紙切れに刃を走らせる如く、見事に切り裂いた。

数秒遅れて真っ赤な粒子が切り口から舞い散る。直後、おびただしいまでの血飛沫が噴き上がり、地獄の炎にまかれるような、死よりも苦しい激痛が襲うのだ。

男はそのとき初めて気付く。

未だ腹部で静止する血まみれの大剣が狂気に満ちた嗤い^{わら}声をあげていることに。

「ヒヤハッ！ くたばんなあッ！」

瞬く間に全身が痺れ、体が死に逝くと、男は悟る。
血の海で薄れゆく意識をたゆたわせ、男は幻を見た。

肉塊から引き抜かれた大剣が少女の手の中で、にたりと嗤う。

無機質な剣に、顔など存在しないはずだが　　死神の不気味な顔を見てしまった気がした。

かつて世間を震撼させた少女連続暴行誘拐犯、法の甘さで無罪となった男に、被害者が待ち望んだ鉄槌^{てつゐ}は、今下された。

恐怖と死という救いのない鉄槌が、死神たちの手によつて。
口からごぼりと鮮血を溢れさせ、誰も通らぬ路地裏に罪人の命が一つ、消えた。

「エスプレッソとフランボワーズタルト一つ頂戴。あまり待たせないでもらえるかしら？」

陽が傾き始め、気温もそこそこ涼しくなってきたこの時間帯。

若者に一番人気のカフェ「シユクレーヌ」は昼の客層もまばらになり、若いカップルが二組、店内にいただけであった。

店外のテラスにも、五席分のテーブルが備わっている。ブルーのパラソルが茜色の光を受けて紫紺に映える。

テラスのテーブルに、客が一人だけ腰を下ろした。十代半ばをすぎた少女。

ゴシック風の白い上着と黒いスカートの制服、短いスカートのおかげで、白く透明感のある肌は惜しげもなくさらされている。

一本一本艶のある黒髪、猫のように吊り上がった大きな目、形の良い薄桃色の唇、細い首に手足……全てにどこか品が漂う。

左右高い位置で結ったツインテールを揺らし、少々不遜な態度で

店員を呼びつけ、ろくにメニュー表も見ずに注文をつけるのだ。

男性店員は営業スマイルで、少女が放った棘のある言葉をさらりとかわし　「かしこまりました、少々お待ちください」　言って軽く会釈をした後、彼は踵を返して店内へと去っていった。

「ウヒヤヒヤヒヤッ！　久々の仕事で俺様超ゴキゲンだぜ、あの内臓を引き裂く感触、たまんねえなあ！」

静けさと安らぎが謳い文句のこのカフェに不釣り合いな、怒号にも似た男の声。だみ声は遠慮なく弾む声をあげた。

「うるさいわね、黙って頂戴テイルヴィング」

テーブルに頬杖をつきながら、少女は少し目線を下げて、声の主　テイルヴィングをじろりと睨めつける。

少女の足元、テラス床のウッドデッキに造作なく置かれた、抜き身の大剣。

暗黒あるいは闇が形になったような漆黒の大剣。禍々しい刃は醜悪なる瘴気を放っているようで。誰もが背筋を震わす代物は、少しおどけた調子で切り出した。

「つれねえなあ、ハニー。吊り上がった目がもつと吊り上がって、鬼ババアみたい……あつごめんなさい、ごめんなさいっ！　嵐お嬢様ごめんちゃい！　ちよ、痛い勘弁！！」

常日頃のこととは言え、暴言を吐かれて微笑んでいられるほど、少女の器は大きくなかった。少女　嵐は片眉を跳ね上げ、不快の色を浮かべると右足に渾身の力を込め、店内に響くほどの衝撃音で、だみ声の主を蹴り倒した。

「いであつ
」

甲高い悲痛の雄叫びをひとつあげると、魔剣は意識を失い沈黙するのだ。

H Y S T R I X 【 I I 】

「お待たせいたしました、こちらフランボワーズタルトとエスプレッソでございます」

「あら、早いね、ありがとう」

丁度うるさい奴が口を閉ざし、嵐が浅くため息を吐きだしたとき、タイミングよく現れたのは先ほどの男性店員だった。

ナチュラルな皮肉を繰り出し、目の前に出されたタルトと、香ばしいかおりと共に蒸気のものぼるエスプレッソを満足げに見つめる嵐。何かありましたら、呼び下さい。そう言って立ち去る店員に見向きもせず、嵐はカップに手を伸ばした。

「何をしておいでですか？ “ヒストリック”、第一任務が終ったのならば、社への報告が優先ですよ」

突如響く泰然とした口調。紳士的な、と言ってよいだろう。しかし、言の葉の中にわずかな苛立ちが隠されていた。

嵐の座るテーブル席の前に、細くしなやかな四肢の犬　ドーベルマンが屹立^{きりつ}しているではないか。

今の声は間違いなく、この犬から発せられていた。

ひと仕事の後、気分よく人気のカフェを満喫しようとした矢先。気配を絶ち、突然現れた訪問者に少女は一瞬で顔色が曇る。

カップに伸ばした手を戻し、大きなため息を一つ吐くと、嵐はゆっくり腕を組んだ。

「そのコードネームで呼ばないで頂戴。わたしは『山上嵐』の名を、まだ捨てるわけにはいかないの。それに、報告は二つ目の任務が終

つたらまとめてするから、ほっといて」

明らかに敵意をむき出しにした物言い、忌々しげに鼻を鳴らす、山上嵐。

互いに視線を交え、少女と犬はにらみ合いを続けた。

「なりませんね。社の規則に反します。ヒストリック、貴女は依頼人であると同時に、黒獅堂に雇われた存在、身勝手な行動は慎んでいただきたい」

声のトーンを一段階下げ、人語を操るドーベルマンは嵐を諭すように口を切った。

カフェテラスに吹き付ける夕暮れの風は、少しだけひんやりとしていた。

不気味に訪れる静寂。

しかしその中に一本の糸が間違いなく張られている。緊張と言う名の、糸が。

今にも弾き切れてしまいそうな　その刹那。

「ハン、監視官が口出すんじゃないやねえよ。俺様のハニーに意見するたあ、いい度胸じゃねえか。ああ？　デュンヴァルト」

ピリピリとした重い空気の中で、ドーベルマンのものでもない、嵐のものでもない声が突如響いたのだ。やけにポリウームの高い、男のだみ声。

名前を呼ばれて、精悍に立ち上がった耳をぴくりと動かす犬

デュンヴァルトはだみ声の出所へ視線を走らせる。

未だ腕組みをし、不機嫌な面持ちの嵐の足元。彼女の側で床に転がる抜き身の大剣を見つけて、デュンヴァルトはアーモンド形の目を細めた。

「わが社の所有物であるお前が私に意見など、それこそいい度胸ではありませんか、魔剣」

「ハッ！ 俺様の今の主はハニーなんだよ、このクソ犬が！」

気絶していたはずのティルヴィングはいつから目が覚めていたのか、ドスを利かせて啖呵をきる始末。

現時刻、客足の少ないカフェ「シクレヌ」の店内にはこの喧騒が嫌でも聞こえているだろう。しかし、巻き添えを怖れているのか、店員が出てくる気配はない。

と、重さを増した空気が、不意に破られる。

「エスプレッソ、冷めちゃったじゃない」

落胆に似た、あるいは気分を害したと言わんばかりのトーン。

嵐は腕を組みながら、大げさに肩をすくめる素振り、テーブルの上に置かれたカップに視線を落とす。

気付けばもう、カップから湯気は消え失せていた。

「行くわよ、ティルヴィング」

席から立ち上がると、未だ床に転がる己の相棒を拾い上げ、監視官に背を向けて少女は歩き出した。

傍若無人な態度の彼女の後姿を見つめながら、デュンヴァルトは疲れた吐息をこぼす。

これから始まる二つ目の任務について、新たな情報を提供しよう

という監視官の好意は、相手のエージェントとその相棒に見事拒まれた。

落ち着きを取り戻したデュンヴァルトは、去りゆく嵐の背中に小さく呟く。

「社への報告、お待ちしておりますよ」

テラスの喧騒が収まった頃合をみて、シュクレエヌの店員は恐る恐る現場へ近づいた。店内からカフェテラスに繋がるガラス扉からこっそり様子を確認。

ところが、夕暮れ色に染まるテラスには誰一人おらず。

しんと静まり返った空間に、シュクレエヌの面々は首を傾げるばかり。

少女のいたテーブル席には、全く手のついていないエスプレッソとフランボワーズタルトがメニューサンプルのように置かれていた。その傍らに、これらには十分すぎるほどの紙幣が一枚、風になびくのだ。

「村の鐘が鳴り終る時刻、座標10 X A 12に現れる目標を処刑……」

都心から外れ、郊外に行くほど青々と茂った木々。夕暮れの涼風。朱に染まった木の葉がそよぐ。

都市と村を繋ぐ唯一の一本道は、砂利だけ敷かれた整備の施されていない、実に不便なあぜ道なのだ。

左右には大木がずらりと背を伸ばしている。

街と比べて人通りは極端に少なく、商人や郵便屋がこの道を通る程度である。

砂利が靴底を刺激する不快さから逃れるように、嵐は一本の巨木に背を持たれ、呟いた。

嵐が巨木から眺めるあぜ道の場所こそが、座標10 X A 12
それであった。

「この情報、ふざけてると思わない？ 待ち伏せして処刑しろってことじゃない」

傍目からは、ごく普通の少女がブツブツと独り言を言っているかたちになる。

カフェで手にしていたおしゃべりな大剣はすでになく、腰にも、背にも下げられていない。

何より、嵐は荷物一つ持たない手ぶらの状態なのだ。

辺りに誰もいないというのに、嵐は問い掛ける。

「処刑標的、ボナパルト3世。現時点までに9件の殺し、今後も被害拡大の恐れあり。敵味方無差別に殺傷する神経障害を持つ。依頼者、こいつの同郷の連中兼被害遺族 ふうん。そうとうイかれた奴なのね」

嵐はスカートのポケットから取り出した、一枚の紙切れに書かれた文を自分なりに噛み砕き、半ば呆れた表情を浮かべて読み上げた。

「はあん、久々に処刑しがいのあるヤツじゃあねえか」

と、突然嵐の脳内に男のだみ声、つまりはティルヴィングの声が響いた。

声はエコーがかかったように余韻を残して脳内を駆け巡る。嵐だけにしか聞こえない、悪魔の声。

「でもこんなうわべの情報だけあっても、標的の顔写真が撮れていないなんて、情報部の連中、何をやっていたのかしら。社に戻ったらあいつらシメるわよ、ティルヴィング」

手にしていた紙切れをぐしゃりと握りつぶし、冷然と言い放つ少女。

再び、脳内に悪魔の声が余韻を残して囁かれる。

『 あいよ、ハニー 』

情報部の社員が震え上がりそんな会話を展開していたそのとき。街から村に向かってくる影が、あぜ道のはるか前方に、一つ見えた。

H Y S T R I X 【 I I I 】

影の存在に気付くと大木から離れ、木陰を出て、夕闇のもとあぜ道中央に屹立する嵐。

徐々に迫る影は、冷酷な死神たちの存在に気付く由もない。

ついに罪を裁く“正義”の処刑が始まろうとしていた。

そう。法で裁けぬと知り、嘆く者があり、裁きを望む。そして罪深きものへ、死という鉄槌を彼女が下すのだ。

処刑執行士、コードネームを、ヒストリックと呼ぶ。

道の中央に凜然と立つ嵐は、ふつ、と全身の力を緩め、静かに左手の甲に右手をかざし、のろいの言霊を吐き出す。

「血の契約を結びし我が騎士ティルヴィング 汝を厭わん 汝を望む 汝を解く」

恐ろしいほど凍てついた少女の声は聞くものを震え上がらせるに十分で。

その場に人がいないのが幸である。

言い終えると、嵐の左の甲がぼんやりと淡い光を帯び、次の瞬間雪氷の如き白い皮膚を突き破り、先端に小さな王冠^{クラウン}の装飾を煌めかす、黒い柄が現れた。

それは、生い茂る木々をざわめかせるほど薄気味悪いだみ声を高らかとあげる。

右手で黒い柄を引き抜くと、出現したのは禍々しくも美しい抜き

身の黒い大剣。

少女の肌から鮮血が流れることはなかった。

抜刀を終えると、左手の甲は全く元通りの滑らかな美手を取り戻していたのだ。

「ゲヒヤヒヤハッ！！ さあて、殺人鬼の不味い血で俺様の喉をうるおそうか」

「あんたに喉なんて無いでしょう、ティルヴィング」

体内から顕現したティルヴィングを、すらりと片手で正面に構える。少女は不敵な眼光でやってくる影を睨み、口元に冷酷な笑みを浮かべた。

転瞬。

処刑の定刻を知らせる、村唯一の教会鐘が大音声で鳴り響く。

腹に響く重低音が村中に染み渡る中、近づく影の存在に、嵐は思わず目を剥いた。

目の前にやって来たのは、錆びたペダルをキィキィ漕ぐ、男。年齢は60代前半と言ったところか？

自転車にまたがり、肩から掛けた大きな鞆を携え、その鞆には、嫌味に思えるほど大きなワッペンが貼られていた。

横一本線の下に、「T」字。

嵐の出身国でもよく目にしていた記号である。

郵便屋……？

どこからどうみても、何ら変哲のない、壮年の郵便屋である。疑問を抱きながらも、嵐はまもなく訪れる処刑時刻 鐘の音の

終わりに神経を尖らせた。

見掛けに囚われてはいけない。だがしかし、この男がボナパルト3世とは思いがたい……。

ゴオン、と大気を震わせ、夕刻の音が、今までよりも長く響いた。余韻が尾を引く合間、嵐の懸念は刹那のうちに拭い去られていた。郵便屋は嵐との距離約4メートルまでに近づいている。

「誰であろうと、関係ないわ。わたしはわたしの仕事をこなすだけ、そうでしょう、ティルヴィング？」

「ああ、そうだともハニー、我が姫よ。俺たちは存分にギャクサツすりゃあいいいんだからよ」

ティルヴィングを正眼に構え、嵐は声を弾ませ相棒に語りかけた。相棒は麗しき主に、軽く答える。

それは歪んだ二者の、狂った問答。

鐘の音の余韻がどんどん小さくなり、大気の震えも収まりかけたとき、郵便屋は行く手を阻む少女の姿を見つけて、その異様さに目を見開いた。

自身に向けられた底冷えのする視線。禍々しい光を放つ、漆黒の大剣。得体の知れない恐怖が、体中にまわりついたのだ。

そしてとうとう、鐘の音が、止んだ。

冷酷なる処刑執行士は右足を軽く踏み出し、標的の首をなぎ払うべく、柄に力を込める。

彼女の殺気が周囲を取り巻き、重苦しい空気が郵便屋の肺を押し

つぶす。

目の前の異常にただただ目を剥き、息をすることも忘れかけ、ぽかんと口を開けるばかりの郵便屋の耳元で、背筋をぞわりとさせる不快な音が通り過ぎた。

それは嵐の目の前に、やってきたのだ。

その座標、10 X A 12。

「位置的にビンゴォ！」

だみ声を絶叫に変換したのは、他でもない、ティルヴィング。

嵐は一切の躊躇もなく、一閃を放った。

左手に握るティルヴィングを右から左に払い、標的の命を一撃で絶つ。

冷酷にて非道、容赦ない一撃……。

穏やかな村の、穏やかなあぜ道は、いつものように静寂に包まれた。

剣を振りぬいた少女はふわりと浮いたツインテールが肩に戻るまで、動かなかった。

いや、処刑の標的を知って動けずにいた。怒りで全身が小刻みに震える。

嵐の目の前には、先ほどの郵便屋が自転車から転げて、哀れにも仰向けで倒れていた。

……もちろん、生きているわけで。

しかし、ボナパルト3世は所定の時刻に、予定通り処刑されてい

る。

「ひっ……！」

しゃがれた声を一つあげ、壮年の郵便屋は凶器を握りしめる少女を仰ぎ見た。

彼女の血走った目（郵便屋にはそう見える）は間違いなく殺人鬼の、それである。

郵便屋は郵便物をそのまま置き去りに、あぜ道を外れ、真横のうっそうと茂った林へ這いずって逃げ込んだ。

嵐はそんな彼を一瞥し、足元に視線を落とす。

そこには、九件の殺しを働き、仲間さえも殺した罪深きものの亡骸^{がら}。
なき

今回の仕事の標的である、ボナパルト3世が息絶えている。

亡骸を見つめ、嵐は確認するように口を切る。

「……ハ、蜂……」

クマンバチ。

尻に猛毒を仕込んだ針をむき出して、その横縞の体は剣撃により両断されている。

呆然と、いや、怒りでこれ以上の言葉を紡げずに、もう一度繰り返す。

「ハ、チ、よね……これ？」

「ぶっ、ぶははっ……！ ギャアー……ッハッハ！ 確かに、殺人鬼にゃあ違いねえーなあ、意外とボナパルト3世はチツチエハチさんじゃねーかよ、ギャアー……ッハッハア！！」

あらん限りの音量と、腹がよじれんばかりの勢いで黒塗りの大剣は笑う。

無論、腹など持ち合わせていないが。

そう、嵐の足元には9件の殺しを働いた恐るべき殺人鬼……。

クマンバチの屍骸が転がった。

炎天下のあぜ道で、少女は腹立たしさにわななき佇立する。
そこに響くのは遠慮を知らぬ、少女の相棒。

そんな彼らを遠巻きで見つめているものがあつた。

「まあ、今回は私の忠告を聞かなかったヒストリックと魔剣にも非がありますし、少しは身に沁みたでしょう……社への報告、お待ちしておりますよ」

少女に聞こえぬ距離で、呟くのは美しき短毛ドーベルマンの犬 デュンヴァルト。

黒獅堂の監視官であるデュンヴァルトは未だあぜ道で立ち止まる彼らに背を向け、静かに去って行った。

処刑執行士の任務は、彼女にとって不本意な形で幕を閉じたのだ

H Y S T R I X 【 I I I 】（後書き）

本作のヒストリックは、背中に針を持つヤマアラシ（ヤマアラシ科）の H y s t r i x からコードネームをとっています。

2章 HUIINGFALLFO【I】

俺はこの株式会社 黒獅堂のイチ社員、ハインファルフオ。

いつも眠そうな顔している、とか言われるけど、失礼じゃないか。

地なんだよ！

こほん……。

付け加えると、俺の肩書きは「仕置統括課課長」。課のトップつてわけだ。

少し詳しく説明すると、会社には局、部、課、係がおかれ、膨大な人員を配備している。

俺には黒獅堂の社員が何人いるか、分からない。

ただの中間管理職として、内勤、外勤併せて39名の部下を守るのが精一杯なわけだ。

ともあれ、俺の担当する仕事はなかなか神経の使う課なわけ。上が振り分けた仕事の中の「仕置」の任務をエージェントへの確に回す事が主たる仕事内容。

「仕置統括課」には26名の内勤 非実働社員と呼ばれる社員が俺の下で働くのだ。

26名を指揮し、任務のための資料を作るなど、仕事は山積み。情報部に入り浸り、細部に渡って情報の漏れが無いように、細心の注意を払って作成する。依頼日の位置取りをシュミレーションで繰り返しテストする。

エージェントの任務に失敗は許されない。

そのために、俺たちが完璧な仕事をしなければ。

任務は的確、迅速に。

そして、客から様々な依頼を受け、その依頼を遂行するのが……
実働社員 エージェントと呼ばれる連中。

書類上は俺の部下として配属されている彼らではあるが、それは紙の上であって。

実際、彼らには社の規則に反しない程度の、個々の自由が与えられている。

立场上、俺の部下でも、上司でもない13名のエージェントを統括するのも、課長の役目。

実働社員と非実働社員は、持ちつ持たれつの関係を保ち、日々の仕事をこなすわけだ。

……課のトップとか言っている割に、格好がおかしくないかって？
スーツを着ている社員もいるのに、なんで俺がTシャツにジーンズかって？

ふふふ、侮るなかれ。
ヴィンテージ物だぜ？

……ごほん。

とまあ、こんな感じで課長はバリバリ働いています。

……実際のところ地味とか言わないように。

え、なに？

ドールが俺を呼んでる？

今忙しいんだけど……え？ 緊急？

わかったよ、ちえ、行けばいいんでしょ、行けば

書類上は、課で一番偉い立場なんだけどな……俺。

あ、ドール。任務あと一件残ってるんじゃないの？ え、チョット休憩？

そうゆう勝手な行動はやめろって何時も言ってるじゃんか！俺が怒られんだよ。

え、なに？

のど渴いた？ しょうがないなー今買ってやるから、すぐ任務に戻れよ。

ベブジNEXTでいいんでしょ。

え、違う？

ベブジNEO？

ボタン、押しちゃったんだけど……

書類上は俺の部下となっているが、エージェントという奴らは一人で任地へ赴く、故に実際のところは「部下」と呼ぶに相応しくない。

だからと言って、パシリはねーよ……パシリは。それに、なんで課で一番偉い俺が怒られてんの？ 泣いていい？

ああ、やだな、もう転職してえ。

え、なに今度は。

ええっ処刑執行士の、あの高飛車なお嬢様が俺を呼んでる？
なんで？！

課が違うじゃん？！

……あーどうも、任務お疲れ様です。たしか、ヒストリック
でしたか。

っ！ 痛ああああっ！！

……ってえええっ、なんで殴るの？ なんて殴られてんの、
俺？！

は？ コードネームで呼ばれるの、嫌なの？

あ、そか。君のヒステリックな性格と、コードネームが一文
字違いだか いだっ！

え、アホみたいな仕事を回された？

情報部の連中はどこに行ったかつて？

さっき部のみんなで、昼食取りに外へ出たよ。

君から帰社の報告を受けた、少しあとに。

あっ、ちょ、どこ行くの

まったく。

俺、あの子苦手なんだよな。

元々どこかの裕福なお嬢様だったらしいし、すぐ怒るし、相棒の

魔剣がいると余計に面倒だ。

つか、俺、とばっちり？

泣いていいですか？

あ、シャル。どした、今戻り？

あれ、そのペットボトル……ベブジNEXT、だよな？

え、ドールに貰った？

さっき仕事に行ったはずだけど、途中で会ったとか？
違う？

へっ？！ ドールが1階ロビーにまだいるの？！

来賓用ソファーに寝転んで、アイス食ってた？！

うっそ！ 上客の依頼がまだ残っているからすぐ出ろって言
ったのに！

あの……バカアーツ！！

……俺の日常は、わりとしんどい……。

HUINGFALLFO【II】

開け放たれた窓から涼風の吹き込む3階休憩室。ブラインドを下
げずにいるため、午後の光が床を熱していた。

眠気を誘う昼下がり。床には心地良い風を受けた黒猫が全身を投
げ出して寝転ぶ。

奥行きのある広いフロアに、スーツ姿の会社員や、私服の者が各
々のんびり過ごしていた。程よい間隔で備わる丸テーブル。そのい
たるところから、和やかに声が交錯する。

休憩室の一角には、3基連なる自動販売機が置かれていた。出入
り口と隣接した自販機は実に使い勝手が良い。

そこに程近い壁際。一人の青年がしゃがみ込んでいた。
襟足でちょこんと結った栗色の頭を垂れ、特に何をするでもなく
壁に背をもたれ、ただただ腰を落として座っているのだ。

通り過ぎる社員達は彼に見向きもせず、気にかけるものはいなか
った。

白地のプリントTシャツと着古したジーンズというラフな格好は、
到底会社員には見えないが、首に下げたネームプレートがこの黒獅
堂の社員であると知らしめる。

プラスチック製の頑丈なプレートには「仕置統括課課長 ハイ
ンファルフォ」と明記されている。

「なにやってんだよ、ハル」

突然響いた、少し乱暴な呼びかけにハルこと、ハインファルフォは垂れた頭をのろのろ上げる。課長という肩書きを首に下げているにもかかわらず、少し眠たそうな、もしくは覇気の無い目のせいで軽薄な人物にさえ見るのが、実に残念。

そんなハインファルフォは己の前に立つ人物へ、時間をかけて焦点を合わせた。

無造作に流した緋色の髪、自信と信念が満ちた紫の瞳。十六、七と思しき凜と引き締まった顔立ちに似合わない、クマのキャラクタ―Tシャツを着こなす少年が腰に手を当て、仁王立ちしている。

「ハル」と愛称で呼ぶあたり、お互い見知った間柄のようだ。

一呼吸おいて、ハインファルフォがこれまた覇気の無い声で答える。

「特に何もしてないけど……俺に何か用？」

平々凡々たる答えを返された少年は、唇をへの字に曲げ、さらに乱暴に言うのだ。

「別にっ！ 俺ね、ハルと違って忙しいから。何だよ、心配して損しちまったぜ」

鼻息荒く、フンとそっぽを向く少年に、ハインファルフォはくすりと笑って軽く謝罪の言葉を述べた。踵を返し、革靴の音を響かせながら去ってゆく友の背に、ぼつりと呟く。

「ありがとう、ドール」

柔らかい笑みを漏らして、独り言のように呟くハインファルフォ。

「ごつごつと重たい音が休憩室のロビーから離れてゆく時、周囲の迷惑も顧みない大音声がロビーを出た通路にあがる。」

「あとでベブジNEO買っとけよ、ハル！」

ドールと呼ばれた少年の、自己中心的パシリ発言はいつもの事ではあるが、どうも声は弾んでいるようで。

声が大きくなるときは決まって照れ隠しをしていると、ハインフアルフォは気付いていた。それだけ二人の付き合いは長いのだ。少し素直ではないドールに、妙なおかしさを感じて栗毛の青年は目を細めた。

しかし、未だ重い腰は上がることがない。

壁にもたれて、窓から雲の多い空を見つめる社員に、自販機の前を通る他の社員達は気にも留めず、歩く。

誰もが無関心で、誰もが無関係。

そんな中、しゃがみ込むハインフアルフォに声を掛ける者が再び現れた。

「ハル、どしたの？ お腹痛い？」

真摯な問い掛けは相手を憂慮するものだった。

可愛らしい少女の声と顔が目の前にあった。

短く切った金髪、深海のような碧眼が困ったように不安げに揺らぐ。右眼に付けられた黒い眼帯と身に纏う黒衣まと 覗き込むように屈んでいる少女の名を、のろのろ焦点を合わせてから呼ぶ。

「シャルトリュー」

ん、と首を傾げてにこりと笑むシャルトリュー。
十代半ばのそれは可愛らしい微笑である。

「ダイジョブ、腹痛くねーよ。ちよつとね、考え事」

少女につられるように、ハインファルフォもにこりと笑ってみる。
元々まぶたの下がり気味の目は、笑うと余計眠たそうに見えるわけ。

「あはっ、大変だねえカチヨーってのは」

「カチヨーってのは大変なんだよ、シャルトリューくん。ストレスハゲ出来たらどーしよう」

シャルトリューが笑うと、殺伐とした空気が漂う場所ですえ、やんわり明るくなるように感じた。

気負うことなく、気楽に談笑する二人の間柄は、気の置けない相手だと誰もが理解できる。

そんな他愛もないやり取りのあと、シャルトリューはぱつと立ち上がり黒い外套を翻す。

「んじゃ、あたしこれから任務だから。行ってくるねー！」

明るい笑顔を向け、大きく手を振って休憩室のロビーを後にする金髪の少女。

ハインファルフォは座ったままひらひら手を振って、任務へ向かうエージェントを見送った。

再び空へと視線を戻したとき。

ぶ厚い雲が光源を遮り、休憩室はすうつと暗みを帯びる。

「せめて、空だけは明るくて、暖かけりゃいいのに」

誰に言うでもなく、ぽつりと消え入りそうな小声で呟く。

ハインファルフォが再び小さく折った膝に顔を埋めようとした、瞬間。

「おうおう、こつたら所で何ばしてらんだ？」

男の低い声が、かなり頭上で響いた。

見上げると、目の前には黒いスーツを纏った長身の男が立っている。

「喜屋武さん！」

「腹でも痛てえのが？」

二度目の間に、思わず目を丸めてハインファルフォは苦笑した。

自販機の隣で男二人がおしる缶とコーンポタージュ缶を手に持ち、休憩室備え付けの丸テーブルではなく、出入り口に近い壁際に座る。

フロアに入ってきた社員の誰もが一瞬ぎょつとした。

プルタブを開けたおしる缶を口も付けずに、ハインファルフォは言葉もなく両手の中で転がしていた。

一方、懸命に内側にへばり付いたコーンを食べようと液体の無くなった缶を傾けるのは、スーツを着た男　喜屋武である。

鳥の巣のようなもじやもじや頭に、ノーネクタイのダークスーツ。極めつけは会社員には不釣り合いなワイシャツ……ではなく、アロハシャツだった。

オレンジ色のハイビスカス柄が目痛い。

しばらくコーンを取り出そうと叩いていた喜屋武だったが、諦めたのかとうとう空き缶を床に置いた。ハインファルフォはまだお汁粉缶を弄いでいる。

「……気に病むことはねえ」

ふと、隣から聞こえた訛りの強い言葉が眠そつな目を、大きく開かせた。

弾けたように俯き加減の顔をあげ、訝しげに喜屋武を見つめるハインファルフォ。

何か言おうとして、言葉が見つからず 空気を嚙んだ。

HUINGFALFO【I I I】

数秒あけて、深く息を吸ってからハインファルフォは、ゆっくりと切り出した。

「知ってたん……スか？　まだ俺と社長と総合統括本課長しか知らないと、思ってたました」

「『知ってた』って、何がだ？」

ハインファルフォの言葉を不思議そうに聞き、小首を傾げる社長秘書。

喜屋武の目に、悪意の色はなかった。

「ハインファルフォが何のごで沈んでらのか知らねえが、分かるさ、気ば病んでるごどくらい。いい若いモンが小さくなって座ってらもんじゃねえぜ」

目を細めてふと笑う喜屋武をみて、心がほんの少し軽くなるのを感じる。

実質社長の右腕として手腕を振るう秘書官。そんな喜屋武は少しも社員を下に見たり、偉ぶったりすることはなかった。

ただの一社員である仕置統括課課長に、今この場で、立場を対等として接してくれる　ハインファルフォは、泣き出しそうになる自分に気付き、慌てて俯いてみた。

そういえば、社に入りたての頃、いつもこの人に気遣ってもらってたっけ

記憶を手繰って、ふと思い出した繋がり。

再びおしるこ缶に視線を落とし、ハインファルフォは穏やかに呟く。

「すみません、ありがとうございます……喜屋武さん」
「なんもだ」

砕けた笑みをこぼすと、喜屋武はよつこらしよ、と掛け声とともに立ち上がる。スーツのしわを直しながら、未だ座ったままのハインファルフォに、声をかけた。

「あとな、社長から預かってらもん、置いといたがらな。まあ、あとでゆつくり聴けばいい」

喜屋武のその言葉に、またも目を丸くする。

一体何のこと　そう言いかけたとき、くるりと背を向けた喜屋武が、休憩室の入り口で立ち止まって、

「それでも苦しいづぎは、依頼するんだな。ここはどつたら依頼でも受ける、黒獅堂なんだしてよ」

言い終え、喜屋武は休憩室のフロアを一步踏み出る。その瞬間、一気に変わる口調。

「仕置統括課の社員が待っているぞ。引き続き課の皆をよろしく頼むよ、ハインファルフォ」

黒獅堂でハインファルフォの名を省略することなく呼ぶのは、社長と、この喜屋武くらいだった。革靴の甲高い音を響かせ、秘書官は去っていった。

残された青年は、ほんの少し俯いたあと、やっと重い腰を上げる。

そうだ、待つてるみんながいる。まだ、頑張れる。

そう心に刻み、若き統括課長は賑わう3階休憩室をあとにした。

向かった先は、自身が所属する課のフロアではなく、黒獅堂の最下層。地下行きのエレベータに乗り込み、誰もいない密室で、十数秒間の沈黙に耐えた。

響く機械音は到着を告げる音^ね。

ハインファルフォは意を決した表情で、鈍重に開く扉から、出た。

エレベータから降り、スニーカーが踏みしめるのは硬く冷たい石の床。地下礼拝堂のような造りの、巨大な空間。

辺りを見渡せば何百、何千、何万ものロウソクの明かりが灯っていた。

どれも消えることなく、ゆらゆらゆらめき、この場所がこの世かあの世かと感覚を惑わせる。地下に充満する花の強い芳香が、脳に染み渡るようだった。

空間は三階建ての家がまるまる入るほどの高さを誇り、広さも目眩がするほどの面積である。そんな広い空間にもかかわらず、ここに立つのはハインファルフォのみ。他に訪れる者はいなかった。

祭壇めいた棚や装飾物が天井に届きそうなほど積み重ねられ、そこは花やロウソクで埋め尽くされている。異常なほどの静けさやこぼれそうなほどの光、胸が詰りそうになる甘い香りも、彼の好むものではないのだ。

そんな光景をぐるりと見渡し、ハインファルフォは居心地悪そう

に、足早に祭壇へと向かった。
程なく進むと、祭壇の前には腰丈ほどの小さな石碑がひとつ、ある。

そこには一言だけ、刻まれていた。

安寧なる世界で穏やかな眠りを

石碑に手を伸ばそうとしたとき、ハインフルフォは、本来あるはずのないものを見つけた。

石碑の上に、ボロボロの録音機。ライター大の小さなそれは、見覚えがあった。

仕置統括課のエージェントが常備する、小型の録音機だった。

急に震えだした右手で、録音機をとると、壊れたツメを押し上げ、再生に切り替える。

そこから漏れる声に、青年はハッと息を呑んだ。

……二……、任務……完了。依頼に……ふ、不備なし……。
でも……すみ、ません……ハル、さん、戻れなく、て、すみませ……

録音機の中で紡がれる、途切れ途切れの声は、今にも消え入りそうで。

喉の奥から絞り出したような。

それは、この声の主の、最期の、声。

ハインフルフォは、電源を切らずに録音機を握り締め、ゆるゆる膝を折った。

ぽつりと、手の甲に弾けた温い雫に目をやる。それが自身の眼から零れ落ちているのに気付くと、堰を切ったように、留まること

なく流れ、伝う。

頬を濡らす涙も厭わず、ただただ、声を殺して、静かに泣いた。

晴天の今日。

薄ぼんやりと空に光を灯す朝方、仕置統括課課長に届いた報告は、あまりにも辛いものだった。

課所属13名のエージェントの内、一人が任務中に負った傷が致命傷となり、生きて帰社することはなかった。

任務は無事完遂したとのこと。

しかし、ハインファルフォの大切な「仲間」は二度と帰らない。

多く存在する黒獅堂のエージェントたちは、死する場合、遺体はその場か、人目につかぬ場所で完全に処分せられ、存在が残らないのだ。そして、命を失った代わりに、この地下礼拝堂に口ウソクの火が灯される。

エージェントは何ひとつ残さず、魂さえも残さず　この世から消えてゆくのだ。

しかし、今、たった一つ、残ったものがあつた。

仲間を想う、優しき仕置統括課部長に向けた、社長の小さな善意。

社内で危険度の高い依頼を受ける課の仕置統括課。

その課のトップはそんな殺伐とした業務が似合わぬ、優しき男なのだ。

肩を震わせ、しゃくりあげて涙するその姿は、威厳の欠片も見当たらない。

しかし、誰よりも優しい青年なのだ。

「……つごめん、ごめんな……もう、戦わなくていいから。ゆつくり、眠れよ……」

握った手をそっとひらき、手中の遺品を潤んだ視界で眺め、ハインファルフォは立ち上がった。石碑の上に録音機をことりとおいた時はもう、壊れて声は聞こえなくなっていた。

ぐずぐずと鼻をすすり、幽玄の空間に背を向け歩き出す。

ふと、何もかも知っていて自分を励ましてくれた喜屋武を思い出し、ああ、と感嘆の吐息がもれる。

『それでも苦しいづぎは、依頼するんだな』

あの言葉の意味が、やっと分かった。

ハインファルフォがそんな愚かな「依頼」をしないと知っていて、喜屋武はその言葉を投げかけたのだ。

そして、左胸に右掌を当て、優しくつぶやいた

「“お前に生きて帰って来て欲しい”、って依頼ができれば、少しは楽になれるかもしれない。でも、そんな依頼は……しない。また戦場に行け、なんて言いたくないよ。これ以上傷つかなくなってい。だから、せめて……お前が逝った空は、明るくて、暖かくあるように、ずっと祈ってる」

心の中で生き続ける、仲間へと、優しく語りかけた

HUNGFAILO【III】（後書き）

ハルはエージェントではないため、コードネームはもっておりません。

彼の名前は、同盟を組んでいるなろう作家さまへ捧げるものです。

3章 LIEVRE【I】

（まったく、この国の者は礼儀というものを知らんようだ）

シルクハットに燕尾服という紳士の装いで人混みに行くのは、この国の者に理解し難い存在であった。

夜の街は、いたるところ人で埋め尽くされている。

昼間よりも明るい光が、紳士の表情を陰しくさせた。

高い商用ビルやデパートが乱立する都心部。群衆が足早に街を行く中、彼はゆったりとした足取りでコンクリートジャングルを進む。人々が振り返り、視線を落として見やる先には。

童話、不思議の国のアリスから抜け出たような、まっ白いウサギ。礼服をきっちり纏った体長45センチの紳士。

彼は己に向けられる奇異の眼差しにうんざりしつつ、心内でぼやいてみる。

（居心地が悪いにも、ほどがあるわ。これだから人間は好きになれんのだ）

ルビー色の双眸に、嫌悪の色が浮かんだ。

シルクハットをくい、と直し、長い耳をぴんと跳ね上げる。鼻をひとつ鳴らす。

小さく可愛らしい手のうちで、彼サイズの古い木製トランクをきゅっと強く握り、間違っても蹴り飛ばされぬよう、注意を払って歩む。

夜の色に映える白は否応なく目を惹いてしまったため、視線の雨は延々と続いた。

この国の者にとって、燕尾服を着飾り、二足歩行をやったのけるウサギはウサギと呼ばない。

よくできた人形か、手品の類か、あるいは。

「リエヴル殿」

ほどなくして、ウサギの紳士は自身の名を　コードネームを呼ぶ、聞き慣れた声を拾った。

控えめで、楚々とした響きを含むが、芯の強さが言葉の隣片に感じられる、女性の声。

ふと、ラパンと呼ばれたウサギはビルの隙間に目を凝らした。華やかなネオンの光とは無縁の、建物のわずかな隙間にできた陰鬱なる暗闇。奥に行くほど、色濃くなる黒。

そのやや手前に声の女性　いや、声の主である黒猫が、静かに佇んでいた。

まるで闇と同化しているような、その肢体。

「社より新たな依頼が届きましたわ。その旨をお伝えに参りました…… 搜索案内士リエヴル殿」

「……ふむ。伝令官のタマどのか」

華奢且つ優美な四肢で地を踏みしめ、一步、脚を踏み出す伝令官。赤い首輪にひとつだけ付いた金の鈴が、常闇の静まり返った路地に、リンと高く鳴る。

この国に珍しくもない黒い猫は、驚くべきことに人語を繰るのだ。そしてこの国に珍しくないはずの白いウサギも、これまた人語を

繰る。

この国では珍しすぎる現象であった。

リエヴルはひとつ、嘆息を吐き出し、暗い昏い路地へ吸い込まれるように、ひっそり街の雑踏から姿を消したのだった。

街は、当たり前前の光景を取り戻す。

背の高いビルの際間に、どこから飛んで来た青い業務用ゴミバケツが、排ガスと埃をかぶって置かれていた。

そこに、一匹の黒猫　タマはぴょんと飛び乗る。

器用に前脚を使い、首輪の裏生地に隠されていた極小のメモリースティックをはじき出す。それはゆるく弧を描いてラパンの真つ白な手の内に収まった。

「ふむ、今回の任務はあまり厄介なものではないといいのだが……」

呟きながら、白毛の紳士は内ポケットからライター大の再生機を取り出し、受け取ったそれを素早くセットする。

電源をONにし、そつと耳に傾けるは、標的となるものの声。

彼の仕事は『音』から始まるのだ。

「まゆ、まゆー！」

築10年以上であろう、赤い屋根の2階建てアパート。

アパート中央に備え付けられた階段を挟み、左右1棟ずつ造られ、

計4棟のこじんまりとした、質素な貸家。

その1階右側のドアには「山田」の表札が貼られている。

盛夏でもあれば窓を開け放ち、どの家も声は漏れてしまうものだが……。

この季節　晩秋に窓を開ける家は少ない。にもかかわらず山田家の声は屋外に筒抜けとなっていた。

もともと外壁を薄く造っているわけで、加えて建物の老朽化も声が漏れる要因となっていた。

「まゆー、聞いているの？　ペロのお散歩、ちゃんと行った？」

「うーん、いったー」

土曜日の昼どき。

秋晴れの空の下、枯葉を舞い上げて少しひんやりとした風が町を吹きぬけた。

山田家では、まだ若い母親が台所で小学校3年生の娘に声をかけた。

とんとん、とまな板を叩く軽快なリズムが聞こえ、幼いまゆは昼ご飯が出来上がるのを、ぬり絵に精を出しながら待った。

そのとき、まゆはペロのことなど頭の片隅にも無かった。

アパートの目の前にある、物干し竿が置かれたほんの小さな庭に、山田家は犬を飼っている。

小さな小さな犬小屋に、半年前捨て犬だったペロを飼っている。

母ひとり、子ひとりの慎ましい生活のなかの、本当に小さな裕福動物を飼うという、小さな裕福。

凍てつく風が吹いても、ペロは外で暮らす、柴犬みたいな雑種。

それがペロ。

まゆは、ペロのことが大好きだという。

ご飯は母親があげる決まりで、お散歩はまゆがする決まり。

しかしお散歩もほとんど母親がやっていて、まゆはペロの頭を撫でるだけ。それも一日一回撫でれば良いほうだった。

それでも、まゆはペロのことが「大好き」だという。

LIEVRE【II】

その日の夕方。

まゆの母親はペロの餌皿片手に庭先へ出ると、アパートの裏手に見慣れぬビルを見つけた。いつこんなものが建てられたのか、と疑問に思いながらも、今は腹を空かせているであろうペロに餌を与えるのが先決だ。

雑草と小石が大半の庭を歩き、いつものように犬小屋を覗いた。

「あら？」

思わず声に出し、もう一度狭い犬小屋を見やる。本来そこにいるはずのペロがどこにもいないのだ。

普段ならば犬小屋の横に打ち付けた杭^{くい}周辺にいるはずなのだ。杭にくくり付けた紐は140センチの長さしかない。

利口なペロは紐をかじったり、いたずらすることはなく。だがそこには、首輪と紐だけが杭に繋がった状態で、草の上に力なく落ちている。

ペロはアパートの庭から、いなくなっていた

翌日、日曜という国民の休日は、大きなデパートや施設が乱立する中心地に、あまたの人を寄せる。

その中を縫うように歩く、小さなウサギの紳士　リエヴル。
伝令官から受け取った依頼を遂行するべく、視線の猛雨を浴びつつ都心部をひたすら進み、住宅地が建ち並ぶ郊外へと向かっていた。

リエヴルは絶えず自慢の長い耳を小刻みに動かし、考えては止まり、耳を動かしては進むのを繰り返している。太陽がずいぶん高くなったところ、気付けば騒音と排気ガスを撒き散らす車の影は無くなっていた。集中豪雨もいつの間にか止んでいるではないか。

どうやらすっかり住宅地を歩いていたようだ。

シルクハットをくい、と直し、リエヴルはやっと一息つこうと草むらに座り込んだ。そのとき。

「ペロっ！」

聴覚の優れた耳に、大音声^{こえ}が響く。それは先日、脳に刻み込んだ『音』。

だが、あまりの音量と唐突さに、肩を震わせ飛び上がってしまった。

心臓が今にも止まりそうな感覚に、己を殺しかけた者へぎろりと鋭い視線を向ける。リエヴルの眼前、それも（息がかかりそうな程の）至近距離に、まだ幼い女の子の顔があった。

草むらから顔だけを出し、そのくりくりの黒目で、小さなリエヴルを見つめている。

努めて冷静に「何か用かね、お嬢ちゃん」、紳士は少女に尋ねる。少女はしゃべるウサギに動じることなく、こくん、と頷き言った。

「まゆ、ペロをさがしてるの。ペロがね、いなくなつて。まゆは、ペロが大好きなのにつ……」

大きな愛らしい目から、ぽろり、一粒の涙が零れ落ち、それからわんわん声をたてて、少女　まゆは涙をこぼした。

「じゃあ、お嬢ちゃんは望み、願ったのだね」

住宅地を走る一本の第三級河川、その河川敷をリエヴルとまゆは一緒に歩いていった。

いや、リエヴルは抵抗虚しくトランクケースを奪い取られ、まゆに抱きかかえられて移動していた　　と言うのが正しい。方角の指示は小さな紳士が主導権を握れただけ、ましといえる。

胸に抱えるウサギが問ったあと、まゆは大きな目をしばたき、首を傾げた。

わからない、という意味だ。

「良い事を教えてあげよう。お嬢ちゃんの家裏に急に大きな建物が建つていただろう？　簡単にいうと、そこは願いをかなえてくれる場所、なのだよ」

白い紳士はゆっくり、分かりやすく噛み砕いて説明を述べたつもりである。

ほんの少し、まゆの顔色を伺うために首を上げた。

「まゆねえ、ペロに会いたい、って神さまにお願いしたの」

言って、その大きな目がまたも潤みだし、リエヴルはこの泣き虫な人間の子供にやれやれ、と嘆息をこぼすのだ。

河川敷を抜けて、再び住宅街の中を歩く少女。その腕には白いウサギの紳士。立派な一戸建て住宅はまゆの背丈を越える壁に囲まれ、車一台分しかない狭い通路が碁盤目状に走っていた。

もはやまゆにはここがどこだか知る由はない。

（声はここらか。まずは連れてこなければどうしようにもないな）

絶えず耳を動かしていたリエヴルは、十字路に差しかった所でぴたりと動きを止めた。同時にまゆは歩みを止める。

今までより、ひとまわり広い通路で、少女とウサギの前を車が通り過ぎた。

再び歩き出そうとした、刹那。

「……見つけた」

真っ赤な双眸を見開き、鋭く言い放つと、まゆの腕からするりと抜けてアスファルトの上に降り立つ。

トランクケースを受け取り、そっと顎に手を当て、何事かブツブツと一人呟くりエヴル。

横からたぶんに興奮したまゆがペロはどこ、と何度も揺すつてくる。

「静かになさい、今」

制止しようにも、痼癢かんしゃくを起こしたまゆが手を振りかざしてきたのだ。

わずか45センチしかない体が、人間の子供とは言え、大きな手と力に耐えられるはずは無い。

慌ててリエヴルは二本の脚で地を蹴り、背後に飛びのいた。

「落ち着きなさい、お嬢ちゃん」

ぴしゃりと切って、めそめそ泣き出すまゆに、今度はゆっくりゆっくり語りかける。

「いいですか。わたしは黒獅堂のエージェント、搜索案内士です。お探しのペロ氏に逢いたいのでしょう？　ならば泣き止みなさい。これから連れてきますが、そんなに泣いていては、ペロ氏も困ってしまいますよ？」

シルクハットをくい、と直し、紳士は諭すように少女へ語りかけた。

手の甲で何度も目をこすり、頷く少女。

リエヴルは満足げにヒゲを動かし、

「では、ここでお待ちなさい」

言つと、ウサギのように走り出し、あっという間にまゆの前から消え去っていた。

「ペロ、もう誰かに拾われてたら、どうしよう。まゆが飼い主ですって言わないと。ペロは絶対、わたさいないもん……」

十字路側の電柱脇にしゃがみ込むまゆは、ぽつりと呟いた。

“自分が飼い主”だと、“ペロが大好き”だと、胸を張って、自信を持って言える。

だが、少女にはなぜ愛犬がいなくなったのか、分からない。

愛犬がいついなくなったのかさえ、分からない。

“大好きなペロ”の散歩をしなかった少女には、それが矛盾だと

分からない。

「へっ……」

【 L I E V R E I I I 】

リエヴルがいなくなつて、何時間経過しただろうか。
まゆには半日以上待たされているように感じた。

「お嬢ちゃん」

「クウン」

不意に聞こえた声に、まゆは俯いた顔を跳ね上げた。
ウサギ^{チジェント}の声と、愛らしく鼻を鳴らす、待ちに待ったあの声。

「ペロ?!」

顔がほころぶ。愛犬が、やっと帰ってくるのだ。

真横から聞こえる声に、まゆは視線を走らせた。

刹那。

短く息を吸い込み、大きく見開かれた目が、揺れた。

2本足で立つ白いウサギの横に、鼻を鳴らして立つ小ぶりな犬。

しかし、その4本あるはずの足は、1本足りない。

綺麗な茶色だった毛は、所々どす黒く変色し、皮膚がめくれ上が
っている。

愛らしかった目は、暗い昏い虚^{うつろ}があいていた。
いつも笑っているような口元は、異様に長い舌が、だらしなく垂

れ下がっている。

左顔面は大きく窪み、赤黒い内容物が異臭を放つ。
血肉の合間にちらりと覗くのは、裂傷した白い骨。
腹部からこぼれ出るのは、大人でも目を背けたくなるような、
ものだった。

そこに、まゆの知る“ペロ”は いない。

まゆの、全身が粟立つ。

「きゃああああああああっ」

喉が張り裂けそうな絶叫をあげ、まゆは路地を全力で駆けた。
二度と振り返ることなく、真っ直ぐ真っ直ぐ走ってゆく。

愛しかったはずのペロに、かける言葉もないまま。

突然去っていった少女を、リエヴルはため息で見送る。
まったく、これだから人間というものは 。 そんな言葉を述懐
した。
じゅっかい

「『神様にお願いした』 か。人間の子よ、確かに信仰は自由で
なくてはならん。だが、所詮神とは偶像。お前の望みを聞いてくれ
たとしても、叶えてくれることはないのだよ。そう、本当に叶えた
い望みが願いがあるのなら、神などではなく ー」

一心不乱に逃げ去る少女の足音をその耳で捉えながら、リエヴル
は虚空を仰いだ。

『ねえ、ウサギさん。まゆちゃんは どうして行っちゃったの?』

ペロが不思議そうに首を傾げて問い掛けた。

『本当のことを知ってしまったから、ではないかね。願いを叶える
ということは、いい事ばかりではないのだよ』

リエヴルはペロと向き合い、少し悲しげに微笑んだ。

『ぼく、まゆちゃんとお散歩したくてあの綱から逃げたのに。どう
して昨日、まゆちゃんは外に出てきてくれなかったのかな』

『ヒトの本質なのだよ、大概の人間^{ニンゲン}という生き物は、身勝手にでき
ている』

吐き捨てるように放った言葉は、ペロに理解できるほど簡易^{たやす}くは
なかった。

首を傾げて、かろうじて原形を留める鼻をぴくぴく動かす。

『ぼく、まゆちゃんにまた、ペロはおრიこうだねって、言って欲し
かっただけなのに……』

寂しそうに呟くと、リエヴルはシルクハットを目深に被りなおし
た。

『そろそろ時間です。これ以上魂と肉体をこの世に繋げておくこと
はできません』

そう、昨晚その肉体と魂が離れてしまったペロに、これ以上現世^{こゝ}

に留まることはできなかった。

リエヴルがこの街の清掃管理所から、こっそり持ち出したペロの屍骸と、黄泉の世界から連れてきたペロの魂。

二つのものを自然の摂理に反して一つの存在に戻す。

だが、それは長い時間、この世界にあつてはならない存在なのだ。

肉体は処分場へ戻さなければならない。

魂は黄泉の門へと戻さなければならない。

『ペロ氏、この度はご依頼、ありがとうございました。貴方の望むカタチどおりにはありませんでしたが、依頼内容である山田まゆに逢いたい、という依頼は無事遂行いたしました』

『うん、まゆちゃんにあえた』

ペロは無邪気に笑う。

まだ若いペロをじっと見つめ、リエヴルは渋い表情を浮かべると、淡々と続ける。

『依頼金の代替物として頂いている貴殿のチケット 「冥府畜生界券」は弊社にとつて素晴らしく有益な価値を持ちます。貴殿は冥府畜生界券を所持しない魂となりますが、どうぞ悲観ならさずに』

難解な言葉の羅列に、ペロは不思議そうな面持ちで首を傾けた。
悲観なさらず と言われても、その意味を理解したとは思えない。

死した動物のすべての魂は、畜生界と呼ばれる黄泉の牢獄で朽ち

て滅びを待つのだ。

ほとんどの魂には、「チケット」が内蔵されており、死後の行き場を定められている。

その内蔵されたものは、「業」と呼ばれることもあった。

チケットを内に持たない魂は「良き魂」と判別され、極楽浄土にて安らかなるときを過ごす。

家から離れた場所で死亡したペロは、すぐさまわが家へ戻るも大好きなまゆに気付いてはもらえなかったのだ。

肉体を離れた魂が人間に見えるはずも無く。

そして、家の裏に見慣れぬ建物を見つけ、建物の中にいた者に進言されるがまま、願いを吐き出したのだった。

その願いは、本当にちつぽけだが、純なる願いだった。

純真無垢なる良き魂に、わずかな善意を

わが社の社長はおそらくそんな言葉を口にしたのだろう。思いを巡らせたあと、リエヴルは満足げに笑んだ。

『では、またのご依頼、お待ちしております』

リエヴルが静かに、静かに終わりの言葉を呟き、手にしていたトランクケースを音もなく開けた。瞬間。

ペロの壊れた肉体から、拳大の白淡に光るものが抜け出て、小さな箱の中に飛び込んだ。それを見届け、リエヴルはそっと、蓋を閉

じたのだ。

目の前に力なく倒れる、生命の光を失った犬の屍骸を見つめると、それを抱えるべく手を伸ばした、まさにそのとき。

「あちゃー、ひどいな、車にでも轢かれたか。袋取ってくれ、ついでにこの屍骸も回収しちまおう」

「犬か。珍しいな、こんな住宅街で」

薄汚れた青色の作業服を着た男達が突然やって来たのを見て、リエヴルは慌てて電柱の側まで飛びのいた。

男達は道端に転がる犬の屍を素早く袋に詰め、作業用の車へ乗り込み、あっという間に去ってゆく。アクセルを踏み、エンジンの回転数が上がる音を、リエヴルは傍らで聞き届ける。

その表情は、間違いなく、曇っていた。

「……人間というのは、愚かでなんとも自分勝手な生き物なのだよ、そんなものに、価値は無いとわたしは思っているよ。君の依頼は、わたしからすると……虚しいものだ」

トランクの中の魂へ向けた静かな語り。

そして小さな紳士は頭に冠かぶせていたシルクハットを手に取り、胸にあてる。

「せめて、かの地では安寧なる時を過ごしたまえ」

リエヴルの耳は、どんな場所の声も聞くことができる、黒獅堂唯

一の存在。

そしてラパン自身、どんな人物でも、モノでも、魂でさえも探し当て、導く。 搜索案内士として最高の腕を持つ、エージェント。

「 搜索案内士リエヴル」 任務完遂、これより帰社する。 座標ME-4,98-501。 転送オート」

搜索案内士が淡白に告げると、

「かしこまりました。 大変お疲れ様でした、リエヴル殿」

涼やかな女性の声が、家屋の塀の上から聞こえてきたのだ。

そつと美しく奏でる声の出所に目を走らせ、エージェントは小さく頷いた。

塀の上には人語を繰る、あの美しき黒猫が。 伝令官、タマであった。

リエヴルが視線を戻した瞬間、狭い路地に、火花が散った。

そこには、目に見ることができない磁界の扉が存在しているように。

彼にだけ、空气中に舞う細かい埃が、その壁に吸い寄せられ、ぶつかってはじけ飛ぶ音が、聞こえていた。

古びたトランク片手に、燕尾服の紳士は見えない壁に向かって歩き出し、そしてその路地から姿を消したのだ。

LIEVRE【III】（後書き）

3章のエージェントのコードネームは「リエヴル」は^{リエヴル}lievre
野ウサギからとったものです。
発音の表記に関してはどうぞ御容赦ください。

4章 Time Difference【I】

1階の自動ドアをくぐると、右手の壁際に置かれた古めかしい時計が、通り過ぎる人々を静かに見つめる。

背の高い振り子時計。己の職務を全うするべく、静かに立っていた。

秒を刻む細い針は、規則正しく、永遠に止まることなく。

丁度短針は数字のV I I I Iを、長針はX I I Iを示したところだった。

朝の8時は、大概人々を忙しくさせるものである。

驚くほど広い1階エントランスホールでは、出勤してきた社員達と、早々に仕事へ向かう社員達、そして、クライアントたちでこつた返していた。

人ごみに酔ってしまうほどの混雑振りだ。

そんな光景を、受付カウンターから全く興味を示さず、どこか一点を見つめ、肖像画のように存在する人物があつた。

まるでフランス人形そのもののような、麗しの受付嬢、ウルウフアツエである。

今日も彼女は多くの人々と擦違い、そしてそれはただの記憶の残滓となる。

「おはよ、ウル」

そんな彼女に声と笑顔を向けるものが現れた。

金髪のショートカットと右目の眼帯が否応無く目に付くも、擦違いば誰もが振り返るほどの少女。十代半ばの笑顔が晴れ空のように明るい。

黒獅堂のエージェント、シャルトリュー。

たった今、自動ドアをくぐってロビーへ降り立ったところだ。
どうやら仕事明けとみえる。

「おはようございます、シャルトリュー」

するりと流れるように視線を動かし、抑揚を欠いた、それでいて心を奪われるような美声で応える。

シャルトリューは彼女の反応に、十分満足した面持ちを浮かべ、ロビーチェアの奥に見えるエレベータへと向かった。

「あーあ、タルいなあ。あたし一応トラブル処理専門なのに、また社長にコキ使われるのかな」

唇を尖らせ、独りばやくシャルトリュー。

無言の受付嬢に見送られ、人混みを掻き分け進む。

どうみても満員の、いつ重量オーバーのブザーが鳴ってもおかしくないエレベータに、小柄な体を滑り込ませた。

受付嬢ウルウファツエとシャルトリューがそんなやり取りをしていた頃。

11階の一角にある、第11会議室ではとある任務を任されたエージェントと、任務内容を伝える社長秘書が円卓に腰を掛け、和やかにコーヒーを楽しんでいた。

喧喧囂囂たる1階ロビーと打って変わって、ここは実に落ち着き払った優雅な空間。

「搜索案内士の中で最高の腕を持つ君なら、つまらない任務だろう

が頼むよ、リエヴル」

ダークスーツの中にアロハシャツを着込んだ、もじやもじや頭の男、喜屋武^{きやん}は立場上、リエヴルの上にもかかわらず、命令口調を避けて今回の仕事抜擢の旨を伝えた。

「うむ、秘書官殿からの指名とあらば、嫌とは言えんしな」

臆^{おそ}長ける響きが、窓際の席からあがる。

彼のためだけに用意された、脚が極端に長いオフィスチェア。

そこにちよこんと座るのは“搜索案内士”。

小さな小さなコーヒークップ片手に、燕尾服を纏った、体長45センチの紳士^{うさぎ} リエヴルは口元を緩めた。

もう一方の手には、小型のメモリースティックを弄いでいる。

会議室の円卓には朝の陽射しが差し込み、紳士の毛艶が淡い橙に映えた。

確かに、今回の任務はベテランのリエヴルにとって、あまりにも簡単なものであった。

リエヴルがカップの底に溜まった黒い液体をくい、と飲み干す。

間を空けずに胸元から白いハンカチーフを取り出すと、上品に口元を拭き、

「では出るとするか」

口を切ると、彼専用の椅子からぴょんと飛び降りる。

喜屋武もまた、椅子から立ち上がり、円卓に置いてあった彼の木製トランクケースとシルクハットをつまみ上げ、リエヴルへと手渡した。

紳士は帽子をぼんと頭へ乗せ、二、三度位置を直してから、長い耳をぴんと跳ね上げた。

「任務完遂の報告を待っております」

喜屋武が口元に弧を描くと、ドアへと向かうリエウルも、人間のように口の端をわずかにあげたのだ。

依頼完遂時間は現時刻より12時間以内。

依頼人はリック・ベン、歳は54、依頼内容は13年前に別離してしまった家族との再会。

家族構成は妻エレナ、当時37歳、娘エリザ当時7歳。

座標122-5、33Y-10。俗称を

ローメ。

同時刻。

黒髪のツインテールを揺らして小ぢんまりとした喫茶店に入る少女があった。

ローメという観光都市のわずかに外れた小さな町マラツィ。

ここは観光地からわずかに外れたのんびり刻の流れる町である。

「Durante preparazione」というプレートが店先に置かれてあるのを一瞥し、少女は喫茶店のドアをくぐった。プレートの意味が「準備中」であることを知っていて。

ちなみに、喫茶店に入ったのは空腹を満たすためではない。あえて言えば、時間を潰すためにあった。

Time Difference【II】

カラン、とドアベルを鳴らし、少女は店内に進み入る。

木目調の床をコツコツと音をたて、ドアから一番遠いテーブル席、つまり店の一番奥に腰を下ろした。

キッチンカウンターで仕込みをしていた店主は、予期せぬ客に驚き、慌ててテーブル席に駆け寄った。申し訳なさそうに、眉を下げながら少女に声をかける。

「あの……お客様、只今準備中として……うちは午前11時からオープンなんです……」

そんな店主の言葉を聞いてか聞かぬか、少女は腕組みをし、座ったままぎろりと店の主を睥睨する。

「この店のおすすめは、なに？ 用意して頂戴」

あろうことが、高圧的な物言いで吐き捨てた。

店を出て行く気など毛頭ないようだ。

そんな高慢な態度の少女に、店主は頭を悩ませ、返す言葉が見つからない。

どうみても十代半ばを過ぎた年齢の少女。どこか裕福な育ちなのか、会話の端には他者を見下すような刺が含まれている。

店主が、やきもきしているその最中。さなか

「……んだニンゲン、ハニーがおすすめ聞いてンじゃねーか、とつとと持ってこい、ダホッ……」

沈黙に痺れを切らし、怒声を張り上げたのは男の、それもひどく不快なだみ声。

声に驚き、店主はヒツ、と小さく叫び、キョロキョロあたりを見回す。

この場にいるのは自分と少女だけのはず。

居もしない男の声に、店主は恐怖に全身が総毛立ち、慌ててキツチンへと走っていった。

頭の悪そうな言い回しではあるが、効果はあったようだ。

「ギャハハッ、ざまあみろ」

「少しは役に立つじゃない、ティルヴィング」

少女の足元に置かれた抜き身の大剣に視線を落とし、少女はフツと唇を歪ませた。

少女の相棒　魔剣・ティルヴィングは自慢げにまあな、と付け加える。

処刑執行士・山上嵐はコーヒー豆の挽かれる香ばしいかおりに満足しながら、朝8時の太陽を窓から見上げた。

観光都市、ローメの中心部にある円形広場は、時計塔を中心点に露天や移動販売の商いが周囲を囲っている。赤レンガを敷き詰めた広場は人気の観光スポットとなっていた。

円形広場の中央にどんと構える時計塔は、観光客でごった返し、写真を撮るもの、ツアーの待ち合わせで集まる人々。百数十年、時を刻みながら存在するそれを、見つめるもの　そんな光景が広がる。

「まちとヒトはうつろうというのに、お前さんは変わらん」

首を持ち上げ、シルクハットが滑り落ちないように手を添える。

そして搜索案内士リエヴルは呟いた。

見上げた先には、所々赤銅色がこびり付いた、件の時計塔。

「このまちを去ってわたしはすっかり変わってしまったよ。191年前にお前さんを見たとき、生きることしか考えられぬただのウサギだったのだ。」

それが今はどうだすっきり化け物じみた

寂しそくに長い睫毛を伏せる、リエヴル。

このまちは、彼の生まれ故郷であった。

転瞬。

時計塔の定時を知らせる大音声が、街中に響きわたる。広場でパ
ン屑をつついていた鳩たちでさえも毎日この音に驚き飛び去るほど
だった。

初めてこの時計塔の声を耳にする観光客達は、おお、と感嘆の声
をあげ、しばし塔の先を見つめている。

リエヴルはというと。

これが任務開始の区切りであった。

広場を離れ、大通りへと向かう。

黒獅堂秘書官からの話では、依頼人はローメの街中を移動してい
るそうだ。厄介な連中が依頼人を探しているとのこと。

依頼人を見つけ出し、任務を遂行しなければならないのだ。

が、大通りはこれでもかという混雑ぶり。

靴を避けつつ、足に揉まれつつ、彼は目標を探していた。

この雑踏の中、辣腕のエージェントの耳は、大通りに向かってくるそれらしい音を聞き取っていた。

人間達の足元を歩く小さな紳士は、幸にもそれらの目に留まることもなく、常の不快な視線を浴びずに済むのだ。しかし、隣を歩く女達の声がどうにも五月蠅く、優れた聴覚は否応なく彼女達のくだらない会話まで入れてしまう。

甲高く、キンキン響く女特有の笑い声は、鼓膜を破り脳に突き刺さってくるようだ。

（たまらん……！）

リエヴルが叫びそうになったとき、両耳がぴんと跳ね上がったのだ。

微かに、荒い息遣いを拾った。

それは建物の隙間から、通りへ向かって近づいてくる。

立ち止まり、リエヴルは瞬時に視線をめぐらせた。

ショッピングモールと商用ビルの隙間を抜けて、人の行き交う歩道に、男が躍り出た。

午前の陽射しに目を細め、腕をかざして光を遮る。

男の荒い息はまだ整わなかった。少しくすんだＴシャツとズボン。細身の体はやつれていると言ってもよかった。

男が周囲をゆっくり見回すと、人々は訝しげに眉をひそめ、足早に去る。

男の周りだけ、過密の度合いが低くなる。

そんな中、男の前に置物のように佇むものがあつた。
はじめ、動かないそれはアンティークか何かだと、誰もが思う。
しかし、

「貴殿がリック・ベン氏ですな。わたくし、ご依頼をたまわりました株式会社黒獅堂のエージェント、搜索案内士リエヴルと申します。これより貴殿のご依頼遂行はわたくしが担当いたします」

燕尾服を纏い、シルクハットを頭に寄せ、愛らしい二本足で立つ紳士　人語を繰るウサギが、にこりと笑んだように、見えた。

Time Difference】 III】

リエヴルは大通りを避けて（蹴飛ばされてはたまったものではない、という理由から）、人通りのまばらな2番街通りを、依頼人と共に歩いていた。

てくてく2本の足で歩くウサギは、やはり否応無く人目を引く。だが人間の喧しい声を聞くより、不快な視線の方が幾分かましである。

依頼人であるベンはというと。

落ち着き無くきよろきよろ視線を這わせ、ときには背後から走ってくるメッセンジャーに脅えて、肩を跳ね上げるほどの恐怖と焦燥感に襲われていた。

目に付きやすい場所を歩くのも気が引けるが、それ以上に、隣の紳士と並んで歩く方が気が引けた。

「ほ、本当に大丈夫なのか？ その……おたくは手品か何か、そういうものなのか？」

当然の疑問をリエヴルに投げかける。

失礼極まりない問い掛けに、落ち着きある紳士は、いささかも気にする様子はなく。

工作上、このような質問はよくあるのだ。

「安心なさい。まだまだ若いものには負けてはおらんよ。それに、わたしは手品などでないよ。現に、生きてしゃべっておるじゃないか」

ウサギがしゃべるものか。

「うむ。191年、この世に生きながらえているのだ。しゃべってもおかしくなかるうに」

さも楽しそうに声を弾ませる紳士。

ベンはこの奇妙なウサギに流され、眩暈で視界が揺れた。

ともあれ、切願だった妻子との再会、やはり誰かの助けが必要だった。

彼は陽の昇らない夜と朝の境目に、不思議なビルに飛び込んだのだ。

ねずみ色の、背丈が低いビル。

無人だとばかり思っていたが、そこはさらに不可解な「会社」であつた。

そして、願いを 依頼をしたのだ。

ほんのわずか、ベンが思考の沼に囚われていたとき。

リエヴルの耳が突然跳ね上がった。

本来ならば愛らしくつぶらな瞳が、時間をかけて翳りを生む。

「よくないものが近づいておるな。仕事上やかいかいごとはごめんだ」

リエヴルが吐き捨てたよくないものはベンの肉眼では確認できず。

しかし、ベンにはその近づくものがなにか、瞬時に察知していた。

まずい。

連中に見つかっては、エレーナとエリザに会うことは二度とできない。

背中に伝う冷たい汗が、ベンの心に焦燥感をもたらした。

だが、

「付いて来なさい、わたくしがマラツツイに住まうエレナ夫人のもとまで、無事案内いたしましょう」

リエヴルが不敵な笑みを造り、告げると、指し示したのはビルとビルの間、幅50センチほどの狭い狭い通路であった。

「ま、まだ……なの、か？　なんでわざわざ……こ、こんな道を通って行くんだ……！」

リエヴルと出合って何時間経つだろうか。

ベンは息も絶え絶えに、小石があちこち転がる坂道を這いつくばって、進んでいた。

舗装もされていない赤土の坂はどうにも手強い。健常の者にはなんら苦勞することの無い傾斜でも、心身困憊の彼にとって、絶壁を這い上がっているように感じていた。

「ふむ。安全且つ確実に依頼を遂行するためだ。まあ、最短距離で行けば歩いて2時間弱だが……安全な方がよからうに」

言って、紳士はさも可笑しそうに肩を揺すった。

橋を使わず川を越えたり、藪を掻き分け進んだり、果てはこの人が通るに適さぬ坂を登るのが、安全といえるのか。そんな疑問を抱きつつ、ベンは必死に前へ進む。

愛するものと再会したい。その一心が彼に力を与えていた。

エレーナ、エリザ。今、会いに行く。

また、一緒にいよう。

今にも心臓が爆発しそうな表情を浮かべるベンに対し、リエヴルはあくまで2本の足を軽快に走らせる。

背後を一瞥、追っ手がいないことを確認して、どんどん緑が濃くなる山側へと向かっていった。小さな喫茶店も、商店もとくに見えなくなった。もはや観光地の色はどこにもない、小高い丘へ続く小道を走る。

「まもなくです、あと少しで」

後で荒い息をたてるベンを奮い立たせるため、言葉をつぐんだ。

丘の上に一軒の民家。赤い屋根に煙突が突き出て、そこから白煙が薄っすらのぼる。

家の裏手、つまりは丘の中心部にうつそうと緑が生い茂る林が見えた。

坂の途中でベンはよろよろと左右に体を振って、とうとう地面に崩れ落ちてしまう。

50代の体に全力疾走と坂道はあまりにも辛いものがある。

ましてや、13年間トレーニングの類は全くと言っていいほどしていないのだ。

そんな中年男に、小さな紳士はそつと励ます。

「愛するエレーナ夫人と娘さんはすぐそこです。あと少し、頑張renaなされ」

人間じみた、包み込むようなあたたかな笑み。

ベンはその励ましに応えるべく、全身の筋肉を奮い立たせ、鉛のような体をなんとか持ち上げる。そして一歩、踏み出すのだ。

ゆっくり、ゆっくり確実に歩を進めてゆく。

妻とエリザに会いたい。その衝動だけが男を突き動かしていた。

とうとう坂を上りきると、一陣の爽やかな風が吹きぬけた。

眼前に現れたそこは、小さな花壇と実り豊かな庭園が訪問客を出迎える、実に穏やかな空間。白いレンガ造りの小さな一軒家、赤い屋根がその情景に溶け込んでいた。

ベンは肺へゆっくり酸素を送り、乱れた息を整えると、やっと待ち望んでいた家族との再会に胸を躍らせた。

玄関へ通じる砂利の通路を一步踏んだ、その時。

その玄関の扉が開いたのだ。

中から出てきたのは、長い金髪を後で括った、40代後半の楚々として美しい女性。

エレナである。

Time Difference【IV】

小高い丘の穏やかな光景は、名のある画家が描く風景画にさえ思えた。

ふと、訪問者に気付いた婦人 エレーナは眉をひそめ、ゆつくりと口を開く。

「どちら、さまでしょうか？」

長い睫毛の奥で瞬かせた瞳に映るのは、頬のこけた中年男性。くすんだＴシャツはよれており、あまり身なりがいいとは言いがたい。

問に答えぬ不審者を訝しげに見つめ、エレーナが踵を返そうとした、その刹那。突然男がよろよろと駆け寄ってきたのだ。

ベンは自身の持てる力を振り絞り、必死に走ると、目を見開いたまま動かない彼女の手首を掴む。ぐい、と引き寄せ、骨ばった腕で目いっぱい彼女の細い体を抱きしめた

まさか、と彼女が気づいた時はすでに遅かった。

驚いて必死に抵抗するエレーナに、ベンは構わず腕に力を込めて抱きしめる。

そして、彼女にとって聞きたくない言葉が、ベンの口から告げられた。

「エレーナ、会いたかった……！ エレーナに、エリザに……」 13

年間ずっと思い焦がれていた……」

男の頬に一筋の想いが流れる。

それは、時間をかけて、地面をたたく。

「あ、あな……た……」

喉の奥に刺が引っかかるような、絞り出したような声。

語尾は蚊の無くように小さく、今にも消え入りそう。

エレーナはガクガクと震えだし、顔面から瞬く間に血の気が失せていくのが見て取れた。

ふと、彼女は背後に誰かの気配を感じて首をそつと回した。

彼女の青い目に映った光景は、家の玄関ドアを、勝手に引き開ける小さな生き物。

白いそれは、黒の燕尾服を纏った、奇妙なウサギ。

視線を感じたウサギはエレーナを一瞥。血のような、鮮血色の双眸が彼女の両目を射る。それは不気味な、不気味な眼差し……。

すつとそのまま歩を進めて中へ入ってゆくウサギに、エレーナは全身に怖気が走った。

一体何をする気……中には、エリザが……！

心で絶叫するも、体を締め付けられ、目の前の脅威に声が出ないでいる。

何とか、声を。

そうエレーナが唇を噛みしめた時。

「ママ、ドア開けっ放しで、どうかしたの？」

中から、澄んだ　まるで歌を奏するような美しい声があがった。
エレナの脳に警鐘が鳴り響く。いけない、と心臓が高鳴る。
ベンは娘のエリザだと瞬時に確信し、期待を胸が踊った。

「来ちゃだめ！！　エリザッ！」

穏やかな丘に、悲痛の叫びが迸る。

そんな人間達の愚かしい心理を楽しみながら、裏手の梯子を伝って、いつの間にか屋根の上に腰を下ろすウサギの紳士は、口角をあげた。にんまり微笑むかのよう。

「さあて、依頼はこれで終了。せっかく牢獄から逃げてきたのだ、13年ぶりに愛しい家族と時間を過ごすがよい」

黒い燕尾を風になびかせ、己の役目を終えたエージェントは高みの見物に喜々とした。

ある日、妻が不倫をしているとあらぬ疑いをかけ、その日やって来た肉屋の旦那と、郵便配達員の青年と、新聞配達の若い男を次々刺殺した、夫であるリック・ベン。

妻の浮気を疑い、娘が己の子かとさえ疑ったベンは、家族へと刃を向ける。

心の中に吐き溜められる負の感情は、ある日突然外に溢れ出るのだ。

誰もが彼の精神崩壊に気付かず、続く憎悪の連鎖。

ベンの場合、愛するが故、憎かった。

妻に止めを刺す寸前、やっと駆けつけた警官に取り押さえられ、一生を堅牢な檻の中で過ごすことになった男。

何度も脱獄を図り、何度も捕らえられ　しかし、とうとう昨晩暗く湿った監獄を抜け出したのだ。

それは命を懸けた脱獄。

刑務官に見つかった時が、彼の命の最後。

だが。

それでも。

願いは一つ。

家族に、会いたい。

「どんな依頼でも受けよう。その未来にどんな結果があろうとも」

リエヴルは歪んだ唇をそのままに、目を細めた。

家から外に躍り出たのはブロンドが美しい女性。

20歳の美貌は若い頃のエレーナそっくりである。

「もしかして、エリザか？　おお……あの時は確か……まだ7歳で……大きくなったな、エリザ……！」

顔をくしゃくしゃにほころばせ、ベンは涙も拭わずよろりと玄関へと向かう。

やっと開放されたエレーナは全力で娘のもとへと駆け寄った。

「近寄らないで、この……殺人鬼！」

エリザを庇うようにぎゅっと抱きしめ、母親は全力で目の前に迫る男を拒んだ。

娘は、ただただ不思議そうに目を丸めるのみ。

ベンは元妻の言葉の意味を理解できず、数回瞬きをすると、わずかに足が止まる。

転瞬。

裏手の林を突き抜けてベンに迫るものがあつた。

獲物を捕らえるべく大地を蹴り上げ疾駆する、獰猛な獣に酷似したそれは、草葉が擦れ、小枝の折れる音と共迫り来る。

獣がたてる微かな音に気付いたのは、この時点でリエヴルのみであつた。

草と土を踏みしめる、跳躍の音をリエヴルだけが聴いた。

その存在にベンが気づいた時、目に映つたのはほんのすこし朱に染まつた晴天。そこに胡蝶のように浮かぶ一つの影。

それが人の影だと気づく時、死は眼前に迫っていた。

影の手には、不気味で大きな、得体の知れないものが握られている。

徐々に輪郭を現す影の正体は、それは典雅な美しさを持った、少女。

ツインテールを後になびかせ、彼女は獲物を見つめて呪詛を吐く。

「リック・ベン。依頼を受けて貴様を処刑する」

冷然と言い放つ少女　山上嵐の言葉はベンに届いてはいなかった。

もはや、ベンの脳は状況を掌握できる機能が停止していたのだ。

なん

何だ。そついい終えぬうち、ベンの首は胴体から零れ落ちた。
その様はまるで、散りゆくツバキの如く。

空から舞い落ちてきた体はそのまま標的めがけて襲い掛かったのだ。

右手に持つ大剣を鋭く薙ぎ、肉を削ぎ、骨を割り、血さえも斬った。

嵐の相棒は、最高の一閃に軽く笑い声をたてた。

Time Difference【V】

静寂の中、どすん、と気味悪い音が辺りに響いた。ベンの虚ろな表情が虚しく転がる。

嵐が地に戻ると、じゃりつと小石の擦れる音だけが、周囲に響いた。

手に握る剣がヒヒツと甲高く鳴いた。
その身は赤い紅い鮮血が滴る。

十数秒の沈黙の後、おぞましい光景を理解したエリザが、あらん限りの金切り声を上げて家へと逃げ込んだ。一般人ならば当然の反応である。

彼女の母、エレーナは声を失ったように口をパクパク開閉し、ゆるりと腰を抜かしてしゃがみ込む。

真横3メートルほどに、忌々しい元亭主の鮮血に染まった首だけが、転がっていた。

エレーナがゆっくりと正面を見上げ、自分を見下ろす凍てついた眼光と視線を交えた。

嵐は、静かに、冷然と告げる。

「良かったわね。貴女の依頼通り、過去が一つ、消えて」

ひどく、重く、冷たい言葉を吐き捨てて、女を睥睨する嵐。

エレーナはその凍てついた瞳に恐怖を覚え、自然と口がわなないた。

ばけもの

そう、嵐には、幻の音が聞こえてしまった。

エレナの瞳には、冷酷の少女が映っていた。

少女の頬に一粒の赤を見つけたとき、改めて戦慄が走る。

まさか自身の依頼が、目の前で果たされると考えてもみなかった。まさか切望していた元夫の死を、目に焼き付けるとは思ってもみなかった。

再び、恐怖の色を濃くしたエレナの瞳と、嵐の冷えた瞳が交わる。

嵐はその視線に苛立ちを覚えた。

自分に向けられるこの嫌悪の眼差し　それは過去幾度となく向けられ、そして己の理性が薄れていったものだ。

「任務完遂……」

ぽつりと呟き、エージェントは続けた。

「ねえ、ティルヴィング……この女も、殺してしましましょう」

どろりと濁った眼光を夕暮れに彷徨わせ、嵐は掌中の相棒である

魔剣　ティルヴィングへ語りかけた。

「ヒツヒツ、俺様はハニーと共にあるぜえ。ああ、ハニーが血を見たいならもつと鮮血を散らせようじゃねえか」

下卑た言葉を発し、魔剣はにたりと、不気味に嗤う。

がちや、と重たい剣を再び天に掲げる嵐の見つめる先には、青ざめ震えるエレナ姿が。

やめてと、幾度も声にならぬ声をあげ、ゆっくり左右に首を振る。にじりと近づく殺人鬼に、非力な女は恐怖で立つこともできず、わずかに後退するのみ。

「お前だって、ニンゲンを殺したのよ？」

「

じつとり湿った声が黄昏に混ざる。

嵐は一切の躊躇無く、ティルヴィングを振り下ろした。

剣閃は美しく寸分ブレることなく、垂直に走る。

エレナの頭部を真つ二つに割り、骨を裂き、臓器を破壊する

はずだった。

細く、硬い剣に受け止められさえしなければ。

嵐の眼前、エレナを庇うように大剣の斬撃を受け止めたのは意外な人物。

突如火花を散らせ出現したのは、金髪の美少女、厄事請負士シャルトリューである。

細い和刀でその十倍の太さはあるつかというティルヴィングを受ける。ギチギチと刃が拮抗する中、シャルトリューの左眼が嵐の黒瞳を刺した。

「嵐、任務は終わったでしょ。処刑以外の虐殺行為は許可できないよ」

シャルトリューの、いつになく鋭い切り口。いさめるように言い放つ。

黒獅堂の中で、“ヒストリック”というコードネームではなく、彼女のホントウの名前を呼ぶのはシャルトリューだけだった。

「嵐、テイルヴィングを納めなよ」

「黙って頂戴、厄負^{やくおい}風情が……！」

「ハニ一の邪魔してんじゃねーよ、シャル」

シャルトリューの言葉さえも今の嵐には届かない。ましてや血を愛する魔剣が聞き入れるはずもなく。

「喜屋武からの指示なの。嵐が今回も暴走したら止めるように、つてね。だから」

言葉を切つて、魔剣を納める様子もない嵐に、シャルトリューは短く息を吐いた。

全身の神経を尖らせ、テイルヴィングを受ける己が和刀　菊丸に全霊を込めた。

嵐は全ての力を大剣に乗せ、同僚さえも殺すべく憎悪に燃えた。

「わたしの前に立つらな、誰であろうと容赦はしない。わたしの望みを阻むなら」

互いの全力が真正面からぶつかり合う。

耳を病むような過擦音に混じり、魔剣テイルヴィングとシャルトリューの菊丸が競り合う、ギチギチ耳障りな音が続いた。

一方の眼光は殺気の炎をたぎらせ、一方の半眼は尖った氷のよう

に鋭く、冷えている。

互いに一步も譲らぬせめぎあい。

が、拮抗していた力は突然相手のほうから、ふと消え失せ、嵐とテイルヴィングは思わずバランスを崩した。

狂気に精神を委ねる嵐には、なぜ厄事請負士が力を抜いたのか理解できず、一瞬目を見開いた。殺気を納める、という芸当は真似できるものではない。

わずかにできた隙が、全てを決する。

脱力したかと思えたシャルトリューだったが、瞬時にして左目に冷静の炎が戻った。

開く瞳孔。

体勢の崩れた嵐の懷に潜り込み、シャルトリューは菊丸をテイルヴィングの刃に滑らせ、一気に弾き飛ばす。

金属の啼^なく甲高い音が虚空に響いた。

右手から引き離された魔剣はなす術もなく。

魔剣を右手から失った処刑執行士はなす術もなく。

失いかけた理性は急速に嵐へと還って来た。

静寂に鏗^{こは}鳴りがひとつ、響いた。

「任務完了」

シャルトリューが一言、羽織る黒衣の内につけた無線に飛ばした。

屋根の上の傍観者^{リエヴル}は舞台を去り行くエージェントに苦笑した。
一瞬のうちにシャルトリューが火花を散らして姿を消した。転送装置が作動したのだろう。

リエヴルは苦笑しつつ、今回の任務の多重さに舌を巻く。
依頼人が別々とはいえ、まさか同じ座標内で任務が被るとは思ってもみなかった。そういう任務内容だとは秘書官から知らされていない。おそらく、処刑執行士も知らされていないかったはずだ。
よほどのエージェント同士でなければ、「仲良く任務遂行」など出来ないのだ。

依頼時間の微調整は喜屋武の仕業だろう。

先にリック・ベンが処刑されては、元も子もないのだから。

不意に痛い視線を感じて小路へ目を配らせると、どうやら嵐がじろりと睨みを利かせているようだった。

唇をへの字に曲げて彼女は相棒を拾い上げ、立ち上がると歩き出す。

きつと鼻でも鳴らしているに違いない、と軽く思考を巡らせてから、やれやれと重い腰をあげる小さな紳士。

傍らに置いていた木製トランクを掴みあげ、搜索案内士リエヴルは夕暮れの空を見上げる。

「さてと、そろそろ帰社するかね」

帰る先は己が居場所。

他ならぬ、黒獅堂。

そして去り際、穏やかだった場所の変わり果てた状態を見つめ、シルクハットを目深に被りなおした。

屋根から降りようと一歩踏み出したその時。勢いよくリエヴルの頭上を飛ぶものがあった。

事後処理係と呼ばれるスペシャリスト集団が横をすり抜け滑空。黒羽の鳥達が庭を指す。そう、それは死体処理のスペシャリスト。

「ああ、さすがは喜屋武秘書官、手早いことで……」

搜索案内士は嘆息をこぼした。

エピローグ

よく晴れた空には満天の星々が煌めき、凍れる^こ空氣が夜の帳から降り注ぐ。

ねずみ色のビルの、最上階から見上げる夜天は、なお美しい。

最上階に位置する社長室で、少年は後ろ手に指を組み合わせながら、闇に輝く、天駆ける白馬を見つめた。

年頃十二、三歳の少年の身なりは乱れ一つない黒のスーツ。

不意に、コツコツと控えめな音が、少年の背後の扉から聞こえてきた。

「失礼します、獅堂社長」

ドアを開けいって歩を進めたのは、社長秘書、喜屋武である。

相変わらずスーツの下にアロハシャツを着用した、もじやもじや頭の秘書官は、片手に握ったバインダーを見やり、静かに切り出した。

「今回搜索案内士と処刑執行士を充てた依頼ですが……依頼人リック・ベンから受け取った前払いのモノは大した額にはなりません。15ビュローがいいところです。彼の元妻エレナ・ベローからの依頼金合わせて10,015ビュローですね」

喜屋武の言葉に、社長は少し渋い表情を浮かべると、短く息を吐き出し言い捨てる。

「……彼の持てる全財産は所持していた結婚指輪しかありませんでしたしね。あれが15ビュローなら、まあ良しとしましょう」

言って、社長は秘書官へと向き直った。
窓ガラスの外に広がる夜に似た、漆黒色の瞳。その中に灯す一つの強い光。

黒瞳は真っ直ぐ喜屋武に向けられていた。

だが、視線は自分を通り越して先を見つめているように思う。喜屋武にはそう感じられた。

今ある現実を視ているようで、もっと遠い未来を視ているような。

「そつえば、シャルトリューは上手くやってくれたでしょうか？」
「……あ、はい。今回のミッションは予定通り収まりました」

少しぼんやりしていた秘書官は慌てて身を引き締め、報告を続けた。

「予定通り搜索案内士“リエヴル”が、監獄から脱走したリック・ベンを刑務、警察官から逃しつつ、依頼内容である妻子と引き合わせ、続いて、元夫が監獄から脱走したと警察官から連絡を受け、自身と娘のもとに戻ってくると踏んだエレナ・ベローの依頼内容である、リック・ベン の 処 刑、これも予定通り処刑執行士“ヒストリック”が遂行。さすがは優れたエージェントたち、と言ってよいでしょう」

それに社長は満足げな笑みを浮かべ、静かに頷く。

「ですが社長の察したとおり、標的を処刑した後、依頼人と接触したヒストリックが機嫌を損ねたようで……」

少し疲れた吐息と低い声調で喜屋武は言葉を切った。そのとき。
二人の背後から突如響く若い女の声。

「だから、あたしが行かされたんでしょ？」

さして驚く様子もなく、社長と喜屋武は気配を絶って現れた侵入者を見やるべく、ゆっくり首を回す。

もちろん、無遠慮な声の主が誰か、知っていて。

「嵐とアホ魔剣を止められるの、あたしだけだしね」

不機嫌に唇を小さく尖らせ、金髪・眼帯の少女、シャルトリューが吐き捨てた。

二人は思わず苦笑し、口をへの子に曲げるエージェントに視線を向ける。

どうやらまたしてもボランティア程度の小さな仕事を充てられ、気分を害したようだった。

獅堂社長とキャンは嵐に甘すぎなんだよ、と頬を膨らませながらぼやくシャルトリュー。

「彼女　ヒストリックはわが社のエージェントであり、依頼人でもあるので、多めに見ている部分はありますけどね」

苦く笑って、社長は再び窓の外に眼を移した。

そう。ヒストリックもとい、山上嵐はすこし特別な立場にある人物なのだ。

かつて彼女が依頼した『自分のいる世界を崩壊させてほしい』という依頼内容は、破格の金額となった。が、幼い彼女に支払い能力

もなく。

社長は『己で成すことができる力』つまりは魔剣ティルヴィングを、同等の金額と引き換えに彼女に与えた。

前者の金額よりも少ないが、やはり莫大な金である。

当然、年端もゆかない少女に払える金額ではない。そこで、社長はこの会社で『社員』として働きながら、返済に充てる契約をする。完済した時こそ、彼女は自由の身となり、真に力を手にする。

彼女は、未だ依頼人であると同時に、社員なのだ。

シャルトリューは社長の言葉も気に食わないのか、ますますぶうと膨れて踵を返した。

ロングブーツをガツガツ踏み鳴らし、「リエヴジーちゃんにローメのお土産あるか、聞いてくるからいいもん」と大声を張り上げ、乱暴に社長室のドアを開け閉めして去って行った。

暴風のように去ってゆく少女を見送って、社長と秘書官は顔を見合わせた。

しばし沈黙していたが、二人はくすりとやわらかく笑んだ。

「まったく。優秀なエージェントというものは、どうも扱いづらいものですね」

言葉とは裏腹に、黒獅堂を束ねる社長　　獅堂の表情は実に穏やかだった。

「全くです」

言って、喜屋武も穏やかなため息を一つついた。

「しかし、彼らを上手く扱ってこそ生まれる利潤。悪くはないでしょう」

ガラス越しの煌めく星々をいとおしそうになぞり、獅堂は外の世界を見つめた。

善意のご依頼も、悪意のご依頼も、弊社は隔てなくお受けいたします。

弊社はどんなご依頼も承る優良企業

株式会社 黒獅堂へまたのご依頼、お待ちしております
おります

エピソード（後書き）

《了》

拙作に最後までお付き合いくださり、ありがとうございました。
心より深く感謝いたします。 黒雛

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2935f/>

株式会社 黒獅堂 I

2010年10月9日06時54分発行